



# 書評 宮本健市郎著『空間と時間の教育史 : アメリカの学校建築と授業時間割からみる』

平野, 亮

---

(Citation)

研究論叢, 25:50-53

(Issue Date)

2019-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010847>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010847>



うことになる。この機会に、神戸大学からの出版物には、『神戸大学教育学部五十年史』（2000年）、『神戸大学百年史・部局史』（2005年）もあるので、しっかり読んでほしい。

大きな、誤植もある。図5-4-2-1、-2、の左縦軸の間違いは（pp.153-154）、ただけない。せっかくの「力作図」ではあるが、これでは「明治後期・大正後期高等女学校体操科受持ち女子教員女子出身校」（実科高等女学校を含む）の推移がわからない。こういう目立つミスが、本書の評価を下げないように願うばかりである。

全体として、重複を避け、わかりやすい記述を求めたいが、体育学における人文・社会科学分野の研究としては高く評価できる。私の年齢に近い女性体育研究者で、これだけ地道に研究業績を積み上げた人はいない。この女子体育教師史研究は、教育学の分野でも、それ相応の評価は受けられるはずである。

「まえがき」「あとがき」からは、ジェンダーにかけた女性の体育研究者の根性を知った気がする。末尾に、このことを付言しておきたい。

（大空社出版刊 2018年2月発行 本体価格16,667円+税）

宮本 健市郎 著

## 『空間と時間の教育史——アメリカの学校建築と授業時間割からみる』

平野 亮（兵庫教育大学）

本書は、アメリカ「進歩主義教育」史を探究してきた著者の宮本健市郎氏が、独立前後～20世紀前半のアメリカ合衆国における学校教育について、その実態及び思想を「空間と時間」の視点から史資料を繙き検討した教育史研究の成果である。主として2001～13年にかけて科学研究費補助金の助成を受けてなされた研究の所産であり、発表された7本の紀要等論文を束ねて、「大幅に」加筆・修正して編まれた。関西学院大学「大学研究叢書」の第196編として2018年3月に東信堂から刊行された。

\* \* \*

章構成は以下の通りである。

- 序章 空間と時間の教育史へ
- 第一部 アメリカにおける学校空間の構成原理
  - 第1章 進歩主義教育運動における学校建築思想の転換——教師中心の教場から子ども中心の学習環境へ
  - 第2章 学校建築における講堂の出現と変貌
  - 第3章 教育環境としての校舎の発見——アリス・バロウズの学校建築思想
  - 第4章 工場モデルから家庭モデルへ——エンゲルハートの学校建築思想
- 第二部 アメリカにおける授業時間割の編成原理
  - 第5章 コモン・スクール成立期の時間割——神の代理としての教師
  - 第6章 工業化時代の時間割——管理の対象としての教師
  - 第7章 新教育運動期における時間割の弾力

	化——教師の権威と専門性
終章	新教育運動期における空間構成論と時間編成論の転換——子ども中心と教師の権威と専門性
付章	日本における授業時間割編成原理の展開

二部構成の第一部は空間＝校舎建築について、第二部は時間＝授業時間割について、主に進歩主義教育／新教育を推進した学校や教育プランの事例が取り上げられ、「変貌過程」が追究される。また付章として、日本の明治期～大正新教育期における学校時間割の考察が、おそらく相対化の視点の提供や“当事者意識”の喚起を意図して、収録されている。

先ずは本書の概要を各章ごとに見てゆこう。

【第一部】第1章では、19～20世紀半ばに至るまでの米国に出現した校舎を「教会」「工場」「家庭」の3モデルに分類し、変遷を追う。19世紀前半の主流は尖塔や鐘楼を備えた教会モデルの単級学校で、「神の代理」たる教師の一望監視を可能にする机椅子の配置など、関心は専ら「教室内の秩序維持に向けられていた」。やがて人口増加著しい都市部に工場モデルの大規模校舎が登場し、特別教室、図書館、体育館、講堂などを備える一方、防災や美的観点からも学校建築が見直される。だが、進歩主義教育の視点から評すれば、それはあくまで「校舎中心／教科中心」であり、子供達は「自由」ではなかった。これを克服するのが家庭モデルであり、1940年開校のクロウ・アイランド小学校を一つの頂点とするという。

第2章では、講堂 (auditorium) に焦点化した校舎の変貌が分析される。壁で区切られる教室の登場により通路としての「ホール」が出現し、19世紀末に集会場や講堂が現れると、工場モデルの学校では講堂を中心に据え

た校舎が設計された。「民主主義精神」を養う場所と目される一方、税金を投じた公共物として地域にも開かれた。だが新教育の熟成につれて、むしろ規模は縮小していく。その理由は、子供の「自己表現と自由参加」の保障には緊張を強くない小講堂が優れていたためとされ、「大講堂を中心においた校舎は、進歩主義教育思想の表現とみることはできない」と結論される。

第3章では、バロウズ (Alice Barrows) の学校建築思想が分析される。デューイ教育思想の具現化を生涯のテーマとしたバロウズは、ゲーリー・プランを評価し、プラトゥーン (platoon) 案と称して推進した。当初は目的別教室や経済的仕組みである点を強調したが、1930年代頃からは、一つの教室の中で色々な活動ができるL字型教室を推す「活動プログラム型」を推奨した。それは、教室が活動を自動的に決定するようなプラトゥーン学校とは対極の考え方であったと著者は評する。

第4章では、工場モデルから家庭モデルへの変遷を主題に、校舎採点簿の作成者エンゲルハート (N. L. Engelhardt) の学校建築思想が分析される。当初エンゲルハートは、標準化・能率化の観点から採点を行ったが、晩年は採点簿を子供の活動を基準としたものに改訂し、モダニズム建築の影響の下、校舎の標準化を批判した。改めて彼も評価した家庭モデルの校舎こそ、「子どもにアジールを保障するための技術であり、進歩主義教育の遺産」だという。

【第二部】第5章では、コモン・スクールが展開し始めた19世紀半ばの時間割の実態が確認される。時計が一般に普及していない時代にあっては、「自然の秩序に従った学習」が重視された。教師は「神の代理」として権威をもち、時間割がその「権威の象徴」とされたという。時間割はこの時期、まだ教師の

裁量によるところが大きかった。

第6章では、その裁量が縮減された19世紀後半の時間割について論じられる。とりわけ、厳密な時間割を要請した契機は、能率的学校運営のためのクラスとグレイドの導入であったという。時間節約の時代的価値観とも相俟って学校に時計が普及し、号令教授などの教授法も発達した。一方で、「時間割を作成する主体」から「時計で管理される客体」へと変化した教師の権威は衰退した。

第7章では、新教育運動による子供の自主性やリズムを重視した時間割について論じられる。20世紀初頭の工業都市ゲーリーでは、効率的な空間・時間の使い方が学校で工夫され評判を呼んだが、それは人が時間割に従属する仕組みだった。同時期には、児童研究の進展により科学的な授業・休憩時間が論じられ、子供が自由に時間割を編成するドルトン・プランのような例も現れたが、なおも学習内容は教師が予め決定するものだった、という点を著者は指摘する。

終章では、残された3つの検討課題が示される。一つは、進歩主義教育運動が孕む階級性の問題。二つは、空間のもつ教育的機能と時間のもつそれとの関連の詳細。三つは、「子ども中心の時間割と、校舎中心の工場モデル校舎が同時に普及していた事実」に見出される「進歩主義教育が孕んでいた矛盾」についてである。

\* \* \*

本書の研究的魅力として、教育史における「空間と時間」という視点の採用を先ずは挙げたい。著者も本研究の着想の“きっかけ”として言及する、本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間』(1992)の示唆は、教育家たちに「子どもが時間をどのように経験しているのか」という素朴で鮮烈な問題意識を惹起してやまない(所謂“ジャネの法則”も加えてますます興味深い論点だ)。アフォーダンス研究や

文化人類学における世界の“様々な時間”の報告などに触れるにつけても刺激されるテーマではあるし、もちろん校舎・教室や時間割などの歴史に限定しても興味は尽きない。これまでも、寺崎弘昭「教室空間と教師・生徒関係」(『教育文化論』2003)や柳治男『〈学級〉の歴史学』(2005)、また佐藤秀夫の「学校文化の起源」研究(『学校の文化史』2005)や西本郁子「子供に時間厳守を教える」(『遅刻の誕生』2001)らが、教育における「空間と時間」の刺激的な歴史的検討を報告し、蓄積してきた。本書もまたこの研究史の一つに加わるだろう。評者は殊に、「講堂」に注目することで廊下から多目的教室(multi-purpose room)に至る“系”を教育思想・方法との関連で時間的継起(歴史)のうちに史料を読み解き定位していく第2章や、同時代のG・S・ホールらの児童研究にも導かれながら“融通の利く”時間割の理想が進歩主義教育運動において提示されていく様子が描き出される第7章などが興味深かった(関連論考として、渡邊隆信「教育コミュニケーションの規定要因としての時間割」(『教育コミュニケーション論』2011)も参照)。

また“知的好奇心”を刺激する仕掛けとして、載録された多数の図表も見逃せない。特に、第一部に示される沢山の学校間取り図(巻頭・巻末、随所)や校舎採点簿(126-7頁)には、読者の関心を惹く新たな記載が何かと見つけられそうである。

しかし、いくつか気になったこともある。2点言及しておきたい。

第一に、訳語の問題である。評者の目に止まったもので、recitationの翻訳について。16,48頁では少数の生徒の指導や「親との面談」にも用いられたという「暗誦室」の「暗誦」として翻訳される一方、149頁では「口頭教授」と訳されている。この語は当時の米国の大学における「復唱」をも意味し(潮木

守一『キャンパスの生態誌』1986), いずれの翻訳も可能なのだが, 事態をややこしくしているのが, 152頁で「理科・実物」と訳された oral instruction の翻訳である。154頁表 6-5 の注記を読むと, 確かに「地球儀」「鉱物」について取り扱うとあるのだが, それに続けて「道徳の教訓」や行為の善悪についても授業する旨が記されており, 「理科」が適訳なのか少し疑問が残る。そして何より, 表中では訳語が「口頭教授」に変更されている。上記 recitation との区別, また関連箇所の読解を困難にしているように思われたので, 補説が付されれば幸いである。

第二に, 本書の論述・分析の立場についてである。著者は, 本書の主旨が, 新教育運動から生まれた学校建築及び時間割を「子どもの自由やリズムを尊重しようとする方法として称揚しようとするのではない」ことを言い, 「成果も失敗も」後世にただ「伝えること」を「使命」と述べる (xi 頁)。確かに, 全体を通じて禁欲的な執筆スタイルなのだが, 結論部分において「現代の学校」が「子ども中心の理念」を必ずしも実現していないことを「課題」と捉える点 (208 頁) からも察せられる通り, 著者の新教育的理想 = 「子ども中心」の理念への強いこだわりを, 評者は全編に読み取った。それゆえに, むしろ評価の視点を定めてしまい, 読者に是非を問うスタイルも良かったのでは, と感じた。例えば, 評者は米国新教育史に明るくなく, 素朴な思い込みから, ゲーリー・ブランに対する本書の評価に読み取りづらさを覚えた。その経済性 (92 頁) や能率的工場モデル (109 頁) に対してどう記述 (評価) するのか。また, 専用教室が子供の「自由」を奪うとする指摘 (29 頁他) や, ドルトン・プランのような“子供の時間割”の裏に内容面での教師の指導が存在したことの指摘 (200 頁) 等, それらは実際どのような意味を持ち得るのか (泰斗デュ

ーイさえこの点に揺動したという (D・ラヴィッチ『学校改革抗争の100年史』2008))。「新教育」以外の, 同時代の教育当事者の証言や「革新主義」の視点からのより広範な社会的検討等を用いた論証も併せて, 本書の中で読みたいと (上記「課題」に踏み込む“望蜀”だが) 感じた。そして, 史料的な制約もあると思われるが, 第一部と第二部で同じ学校における建築と時間割が論じられれば, また面白いだろう。

(東信堂刊 2018年3月発行 本体価格 3,900円+税)